

すくわくプログラムを通して、子どもから 出発する保育における保育目標『主体性を もって対話できる子』の姿を探求していく

0歳児クラス 感触

3歳児クラス お絵描き

4歳児クラス イメージの世界の共有～友達との関係性の深まり～



富久町保育園
令和6年度 研究発表

0歳児クラステーマ「感触」

子どもの姿を踏まえ、どうしてこのテーマになったのか

0歳児は人と関わり合い、肌と肌が触れ合うことで安心して過ごし愛着関係を築いていく。日常の園生活の中で、食事では舌に触れることで味を知ったり(味覚)、物の形や握んだ感覚を知っていったり(触覚)など様々な場面で触れる体験をしている。また、安心出来る環境だからこそ、見て(視覚)触ってみたいと思ったり、音を聴いて(聴覚)触ってみたいと思ったりしている。こうして五感を刺激されながら初めて出会うもの、人などの環境全てに対して触れ、その感覚から知り、確かめる姿から「感触」をテーマにした。

育てたい子どもの姿(年齢別保育目標に基づいたねらい)

月齢や入園時期が違うことから個々によって変わってくるが、年齢別保育目標の三つの姿※を踏まえた上で下記を挙げる。

- ・子どもたちがたくさんの“触れる”経験を積み重ねていく
- ・自らやってみたい、触ってみたいという意欲が育ち、そこから興味関心が広がる

保育士がすべきこと(ねらいを叶えるための環境・配慮点)

- ・個人差、興味、関心に応じた素材を準備する
- ・安全面に配慮する
- ・子どもの行動を見守り、遊びに取り入れる
- ・保育士との信頼関係を築く
- ・保育士や他児の遊びの模倣を楽しむ

- ※ 1体も健やかに伸び伸び育つ
2身近な人と気持ちが通じ合う中で愛着関係を築く
3身近なものに自ら関わり感性が育つ



活動①ボールプール (6月頃)

0歳児クラス

ねらい

- ・全身で感じる
- ・ボールに触れ、つかむはなすなどの手の動きを促す
- ・ボール遊びを楽しむ

振り返り

- ・ボールを手でかき回したり、プールの中に入り全身で感じる遊びからスタートした。
- ・様々な素材を用意することで、子どもたちそれぞれの遊びへの関わり方を見ることが出来た。
- ・子どもの見つけた遊びに対して声掛けや共感しながら、共に遊びを楽しんだ。
- ・扉の向こうにおもちゃを落とすという子どもの行動をヒントに、穴あき段ボールを準備をした。



活動の様子・子どもの姿の考察

- ・ボールプールを室内に配置する
- ・プールの周りから、ボールに触れる
- ・プールの中に入る
- ・泳ぐように遊ぶ
- ・ボールを投げるという遊びが始まる

↓

この遊びが続いた

↓

棚から玩具を出して、扉の向こうに落とすという姿があった



次の活動へ

活動②穴あき段ボール (7月頃)

ねらい

- ・自らやってみようという意欲に繋がり、そこから興味関心が広がる
- ・保育士から遊び方を提示するのではなく、子どもが段ボールを見つけた時の行動を大切にする



振り返り

- ・素材がボールだけの活動から段ボールというモノを加え変化が生まれた。“ボールを入れる”という遊びからつかむ力が強くなった。
- ・低月齢児は穴の開いた段ボールにつかまり立ちをすることを楽しんでいた。
- ・落とすという感触は、プレート落としで感じていた。



活動の様子・子どもの姿の考察

- ・段ボール箱に、穴を開けた物を用意した
- ・遊び方は子ども自らの関わりを見守った
- ↓
- ・遠くから眺める、穴を覗くなどの姿があった
- ↓
- ・しばらくすると月齢の高い子が、ボールを入れ始めた。
- ・ボールが中に入ると箱の中を覗く姿、ボールだけではなく玩具を入れる姿もあった
- ↓
- ・他児も模倣を始める。高月齢児はボールを全て箱の中に入れるまで遊びを続けていた
- ・段ボール箱を押して歩く児もいた
- ↓
- この遊びが続く

次の活動へ

活動③遊びの拡がり (10月頃)

0歳児クラス

ねらい

- ・自らやってみたいという意欲に繋がり、そこから興味関心が拡がる
- ・保育士から遊び方を提示するのではなく、子どもの発見や行動を大切ににする

振り返り

- ・段ボール箱にボールを入れることでその楽しさや不思議さを知った。
- ・段ボール箱以外にも箱や穴には物を入れるようになった。(保育士が片付けをしようと準備したカゴにも保育士の真似をして玩具を入れるようになった)
- ・遊ぶボールの種類が増えた。園庭ではカラーボールとは質感の違う大きいボールを抱えたり、バケツに入れたりしていた。



活動の様子・子どもの姿の考察

- ・穴あき段ボールに入れられるボールが全てなくなると、保育士がボールを出していたのだが、その様子を模倣し、ボールを取り出そうとし始めた
- ・初めはなかなか出せず、中でボールをかき混ぜていた
- ↓
- ・段ボール箱からボールを出せるようになり、出す遊びへと拡がった
- ・戸外では雨水溝などの穴を見つけると覗き、葉っぱや石を入れるといった遊びも見られるようになった

テーマの振り返り



テーマへの振り返り

・感触という経験は、日常生活の様々な場面にある。
その様々な経験を通して、自分自身の感じ方を知ったり、自分の身体を知ったりしたと思う。また、素材と関わっている時は、その素材との対話が生まれていたかと思う。

・個々での育ちがある中で人(保育士や他児)との関わりを通しての育ちも見られた。保育士との関わりという点では、0歳児という初めての経験が多くある年齢に対して、“触れてみよう”と思えるような「自らやってみたい」「触ってみたい」という気持ち(好奇心)を引き出していく関わり(安心感)や日頃からの関係性は大切であった。また、子ども同士の関わりが生まれる中で他児の様子を見ている姿や時には模倣しているような姿もあり、そのような時は声を掛け過ぎず、見守ることの大切さを感じた。

・様々な素材と触れ合っていく中で手で掴むだったものが、指先で摘む、ちぎる、引っ張るなど手先の発達が見られ、出来ることが増えていった。
また、一度だけではなく同じ遊びを何度か行うことで、遊びが変わっていく(展開していく)ことに気付けた。



育てたい子どもの姿の振り返り



育てたい子どもの姿(年齢別保育目標に基づいたねらい)の振り返り

「子どもたちがたくさんの“触れる”経験を積み重ねていく」

・ボールプール以外にも紙(新聞紙・お花紙など)・布(バンダナ・マット・シフォン布など)・緩衝材・砂・芝・葉・小麦粉粘土・寒天・水・氷などの素材も環境として用意した(常設できるものもあれば、活動として用意するものもあった)

また、食事中での手掴み食でで感触を感じている姿も多くあった

・様々な素材と触れ合う中で感触の違いを感じているようだった(積極的に触る、恐々触る、温かい/冷たい、全身で感じる、指先で感じる等)

「自らやってみたい、触ってみたいという意欲が育ち、そこから興味関心が広がる」

・担任と愛着関係が築かれていく中で、その関係性を基盤に担任以外の職員とも関わるようになり、安心出来る環境のもと自分らしさを出せるようになった

・愛着関係という基盤が形成されたことで、新しいモノに対しての興味関心が湧き“なんだろう?”と覗きにきたり、触ってみたいしていた

・数人が近づくことで、それを見ていた他児も興味関心が湧いていなくとも、他児につられて近づいていた(他児の反応を見る中で意欲が湧いてくることもあれば、そのまま離れることもあった)

・子どもたちにとって素材が特別なものではなく、日常の中にある自然なモノになっていくことで“やってみたい”“触ってみたい”という意欲が育ち、興味関心へと拡がることがあった

保育士がすべきことの振り返り



保育士がすべきこと(ねらいを叶えるための環境・配慮点)の振り返り

- ・自らやってみたい、触ってみたいという意欲が育ち、そこから興味関心が湧いている児には、自ら様々な物に触れられる機会を積極的に作っていった
- ・触れることが苦手な児には、思いに共感し、無理強いさせなかった
- ・どのような素材であれば、その児の中で「触れてみたい」という思いが生まれるのか他の素材を用意してみた
- ・子どもの姿を見てこの素材はどうだろうと担任間で話し合いながら環境を構成していった
- ・月齢差や個人差に合わせて素材を変えるなどの配慮が大切であると感じた
- ・感触に対する子どもたちの反応を保護者の皆様にも共有したく考え、6月のとみっちゅファミリーデーでは「感触あそびのブース」を設けた。また、11月の運動会親子競技では、全身で感触を感じられるような感触マットや大布あそびを取り入れた

3歳児クラステーマ「お絵描き」

子どもの姿を踏まえ、どうしてこのテーマになったのか

3歳児クラスになりクレピツ、色鉛筆、紙などが常設され、お絵描きが常に来れる状況になった。

始めはクレピツを立てており描く道具というよりも遊ぶ道具になっていた、3歳児の中でお絵描き＝塗り絵になっていた。

その結果“きりんは黄色” など固定概念が強く自由に描く児が少なかった。4、5歳児クラスになると“友達と同じじゃないと”“〇〇は赤だよ”と絵を描く時も現実の物をイメージして描くことが増えてくる。3歳児クラスだからこそ物の色や形など固定概念に囚われずに想像と現実の世界を行き来しながら、自由にイメージしたものを描いて欲しいと思った。



育てたい子どもの姿(年齢別保育目標に基づいたねらい)

- ・自分のイメージを大切にしながら自由に表現することを楽しむ
- ・友達との表現に触れて違いを楽しんだり興味を深めたりする

保育士がすべきこと(ねらいを叶えるための環境・配慮点)

<環境>

活動①

- ・塗り絵をやめた
- ・様々な色・素材・形の紙(画用紙)
- ・クラフトパンチ、その枠
- ・△□○を描いておいた白い紙

活動②

- ・シール、カラーセロハンなどの素材
- ・デザイン定規

活動③

- ・はさみ
- ・のり
- ・折り紙

<配慮点>

- ・お絵描きが苦手な児に対して、ネガティブな感情になっている時に「上手だよ」「一緒に描いてみよう」などとお絵描きに対して前向きになれるような声をかける
- ・友達の表現を見ることで刺激され、模倣や工夫をする中でイメージが広がっていくよう保育士は過度に提案せず見守っていく



活動①様々な色・素材・形の画用紙 クラフトパンチ（6月頃）

3歳児クラス

ねらい

- ・自分のイメージを大切にしながら自由に表現することを楽しむ
- ・友達との表現に触れて違いを楽しんだり興味を深めたりする

振り返り

- ・最初、クレピツは立てて遊ぶものだったが、様々な道具や素材を使って表現していくうちにお絵描きの道具として認識していった。
- ・保育士のお絵描きを楽しんで欲しいという思いから塗り絵をなくし、様々な素材・道具を用意した。絵を描く楽しさを知り、自分で描ける道具が増えたことで“自分で描いてみたい”という気持ちが育ってきた。

次の活動へ



活動の様子・子どもの姿の考察

- ①塗り絵を設定からなくす
→初めは「塗り絵したい」という声が多かったが、新しく設定した紙を見せお絵描きに誘った。
- ②白い紙だけではなく暗めの色画用紙や形を用意した。
→暗い色画用紙に描くことで白や薄橙といった白い紙だと見えない色も使って描くようになり使う色の幅が広がった。
- ③クラフトパンチの形をのりでただ紙に貼る児もいれば、貼った形の周りに絵を描き加える児もいた。
→クラフトパンチの切り抜いた紙に注目し、それを使い中を塗りつぶしてみたり、貼らずに枠の中をふちどってみたり、自分で描くことの楽しさに気付いた。

活動②シール、カラーセロハンなどの素材 デザイン定規（10月）

ねらい

- ・自分のイメージを大切にしながら自由に表現することを楽しむ
- ・友達との表現に触れて違いを楽しんだり興味を深めたりする

振り返り

・様々な様々な色・素材・形の画用紙やクラフトパンチを通して自ら絵を描く児が増え、自分で描ける楽しさを知っていった。
・紙以外の素材にも触れて欲しいと感じ、シールとカラーセロハンを出した。シールは初め、素材その物の用途（貼る）として紙に貼る、身体に貼るという使い方が多かったが、徐々に遊びに変化が生まれシール+描くという表現へとつながった。1つの素材だけではなく、素材を組み合わせることで描いたり、作ったりできる物が広がる事にも気づいていた。



活動の様子・子どもの姿の考察

①シールを設定した。

→初めは、ただ紙に貼ることを楽しんでいて、徐々にシールの周りに丸を描いて“目”に見立てたり、シール同士を丸く貼って“花”に見立てていた。

②カラーセロハンは、紙とは違い透ける素材であることを知って触れてほしいという思いから、保育士が蛍光灯に向けて透かして見せた。「眼鏡みたい！」と1人の児が言ったことをきっかけに眼鏡作りが始まった。

→画用紙とカラーセロハンを組み合わせる眼鏡を作ったことから違う素材を組み合わせることに気付いた。そこから、そのまま貼ったり、カラーセロハンを丸めて食べ物等のようなものに見立てていた。

③クラフトパンチの形や枠を使う様子からデザイン定規を設定すると枠をなぞる事を楽しんでいた。

→定規の形(丸や長円形)を見て、そこからイメージを膨らませて顔やオムライスを描いたりしていた。

今までは保育士に「描いて」と頼むことが多かったが、自らのやり方で描くようになってきたり、今までお絵描きに興味を示さなかった児も興味をしめしたりするようになった。

→描き方がわかってきたことから道具を使わずに描く児も増えてきた。

次の活動へ

活動③はさみ 折り紙（11月）

3歳児クラス

ねらい

- ・自分のイメージを大切にしながら自由に表現することを楽しむ
- ・友達との表現に触れて違いを楽しんだり興味を深めたりする

振り返り

- ・クラフトパンチやデザイン定規を通して“形”に興味が出てきた。そこではさみを出したことで自分で好きな形に切れること、また折り紙から好きな形に折れることでよりイメージを作る楽しさに繋がった。
- ・友達が作っている物に興味を持ち、自分も作りたいと思い憧れを持って真似して遊びが広がる児もいたが、反対に悔しいと感じる児もいた。「上手だよ」「一緒に描いてみよう」などと前向きになれるように声を掛けた。



活動の様子・子どもの姿の考察

①保育士の思いとして、はさみを使うことに慣れてほしいと思いはさみを出した。出したことで興味を持ち、切る事を楽しんでいた。

→同時期から折り紙も楽しんでいた。
財布やコップを折り紙で作ったことで中に何か入れたい気持ちが生まれ、最初はただ切ったものを入れていたが最近では、自分で丸を描いてお金を作り、切って入れるようになった。

②折り紙では、説明書(折り方)を見ながら折るだけではなく、自分の作りたいものをイメージしながら折る児や好きに折っていくうちにその完成した形からイメージを拡げて描いたりしている児もいた。

③友達の表現を見て、自分の作品と見比べてもどかしさ、怒り、悔しさを感じていた。
友達の表現に刺激されて、憧れを持つこともあるが、悔しさや「できない」「下手くそだ」とマイナスに感じることもあった。

テーマの振り返り

テーマへの振り返り

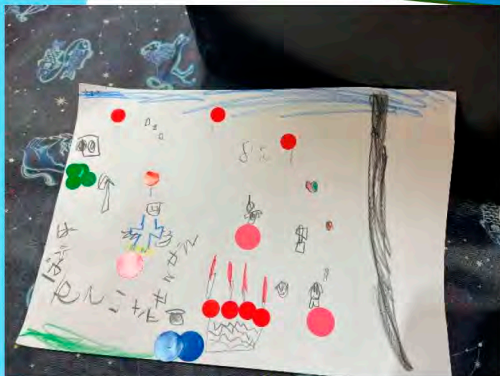
塗り絵の設定をやめ、お絵描きだけにしたことによって、様々な素材や道具を組み合わせ、より自由な発想や方法で自分なりの表現を楽しめるようになった。

また、普段お絵描きに興味がない児も、友達の姿を見て、興味を示し、描き始めた。そして、自分と友達の表現の違いに気付いて、楽しんだり、悔しがったりという姿も見られた。

担任としても悩むことが多いテーマだった為、良く話し合うきっかけにもなった。



育てたい子どもの姿の振り返り



育てたい子どもの姿(年齢別保育目標に基づいたねらい)の振り返り

○安心して生活する中で、自分の世界を拡げていく

→保育士や友達に描いたもの、作ったものを見せて周りに認められることで安心や自信になり、更に表現を深めていった。

○想像と現実の世界を行き来し、イメージを拡げて思う存分あそぶ

→固定概念に囚われずに同じ紙の上に、現実ではないようなモノの組み合わせの絵を表現したり、『その児ならではの世界観』を表現したりしていた。

○他者との関わりの中で、楽しさや違いに気づく

→友達の絵や作品を見て刺激を受け、友達に「どうやってやるの?」とやり方を聞いて同じものを作ろうとすることもあれば、「私は、これ描いたよ」と描いたものを互いに見せ合い違いに気付いて楽しんだり悔しがったりしていた。

保育士がすべきことの姿の振り返り

保育士がすべきこと(ねらいを叶えるための環境・配慮点)の振り返り

・様々な素材や道具を用意する中で、素材や道具の出すタイミングの難しさがあった。しかし、子どもの姿をよく観察し担任間で話し合いながら環境を作ることで子どもたちの興味も広がった。

・お絵描きをテーマとして取り組んでいく中で、子どもたちの紙の使い方に悩んだ。描いてない部分が多くあるのに新しい紙を使っている様子や少し描いては「何か違う…」と思うのか捨てる様子など大人の視点では、紙の無駄使いと感じる姿が多くあった。担任間で話し合いを行い、A4サイズの4分の1のサイズにして出した所、子どもにとって描きやすいサイズだったのか絵の描き方や紙を折って使う時など紙を全体的に使う児が増えた。

・11月に保育実習生が責任実習を3歳児クラスで行った。学生より子どもたちの興味関心のあることとして『紙』が取り上げられた。これは、担任をしても実習生という短期間しか子どもの姿を見ていない人にも3歳児クラスの興味関心のあるものが伝わったということとは嬉しいことであった。

責任実習も日常の保育の環境設定として、実習生が用意した○△□の小さい画用紙を設置し、それを子どもたちがどのように使うかというものだった。

子どもたちの様子は、画用紙をのりで紙に貼り、その画用紙の中に絵を描いたり、形からイメージして想像して紙に描いたり、小さな画用紙に直接色を塗って作品を作ったり楽しんでいた。

小さな形ある画用紙はクラフトパンチで型抜きしたものが多く、単純な形は用意していなかったが単純な形でもここまで遊び広がっていくことに新しい発見があった。

・友達との違いに気付いて自分は出来ないと感じる気持ちを持つ児もいたが、悔しいと感じながらも取り組むことで諦めずにやってみようとする力が育っていると感じた。

4歳児クラステーマ 「イメージの世界の共有 ～友達との関係性の深まり～」



子どもの姿を踏まえ、どうしてこのテーマになったのか

4歳児クラスは、イメージの世界で遊ぶことを好む児が多かった。生活面（食事やお仕度、食事など）では保育士に甘えることの多いクラスだが、遊びに関しては子どもだけでやりとりすることが多く、保育士が遊びに入ろうとするとそのイメージの世界が壊れてしまう場面もある程だった。

また、“自分は”という思いを強く持っている児が多いクラスでもあり、思いがぶつかり合うことも多々あるが、遊んでいる時には『友達』という意識が強くなっていた。



育てたい子どもの姿(年齢別保育目標に基づいたねらい)

○心動かされる体験(イメージの世界など)を通して、人とのつながりを楽しむ

イメージの世界での遊びを通して、思いや意見を伝えたり、友達の話を聞いたりすることやみんなで何かする楽しさを知って欲しいという思いがあった。

保育士がすべきこと(ねらいを叶えるための環境・配慮点)

- ・子に興味を合わせて環境を設定したり、遊びを提案したりする
- ・子どもたちがイメージの世界を十分に楽しめるよう時間や場所を保证する
- ・遊びが広がるような声かけをする
- ・遊びに入り込まず、見守る



活動①バーベキュー 4月～

ねらい
イメージの世界の共有と友達との関係性の深まり

・4月から少人数ではあったが、バーベキューごっこをする姿があり、その後も継続して遊んでいた。



振り返り
初めは1～3名ほどのやり取りであったが、5～6名に増えそれぞれが自分のイメージを伝え合うようになった。伝え合うことで一つのイメージにまとまるようなことは無いが、互いのイメージを受け入れ合い、その時の『バーベキューごっこ』というイメージの世界が生まれていた。



活動の様子・子どもの姿の考察

①公園の切り株で料理を作っている児が数名いた。その時、枝に葉を刺しての『バーベキューごっこ』に発展していた。(主に焼く食材はマシュマロか肉であった。)

②枝を使ってバーベキューごっこが継続されるようになった。枝を串にして材料に見立てた葉を刺す児(葉の色を見て、イモや野菜等細かく決めていた)や枝を山のように積んでバーベキューの火を起こそうとしたりする児がいた。

③バーベキューごっこをする為に、まず枝を集め始めるようになった。それぞれが枝をどう使うかのイメージはバラバラであったが、枝を集めているうちに集める事が楽しくなり、バーベキューをという遊びを忘れ、そのまま離れてしまうこともあった。しかし、集めた枝を友達に見せようと戻ってくると思い出して、また『バーベキューごっこ』というイメージの世界に入るという事を繰り返す児もいた。

次の活動へ

活動②お店屋さんごっこ 7月～

4歳児クラス

ねらい

イメージの世界の共有と友達との関係性の深まり

- ・4、5歳児が同じ部屋で過ごす園のレイアウトもあり、年上の児の影響を受けて、折り紙などの製作が盛り上がりを見せていた。
- ・4歳児は自分の作りたい物を折り紙で表現するようになってきていた。

振り返り

- ・バーベキューごっこよりもイメージの共有がしやすかったのか同じイメージで遊んでいる様子があった。
- ・戸外でも『お店屋さんごっこ』を楽しむようになり、石や葉をお金や売り物に見立てて遊んでいた。
- ・今までは、お店屋さんとお客さんに分かれていたが、友達同士で役割分担をしながら一緒にお店屋さんになりきって遊ぶようになった。



活動の様子・子どもの姿の考察

①折り紙であめを作り始める児がいた。作り終わると、机の上にあめを広げ『お店屋さんごっこ』を始めた。それを見て、同じようにあめを作っていた児や今まで作ってきた作品を並べて、お店屋さんごっこを始める児が数名いた。これを機にお店屋さんごっこをする子が増えた。

②後日、英語イマージョンでも『お店屋さんごっこ』をして欲しいとリクエストした。レベッカ先生との『お店屋さんごっこ』では、おもちゃのチップをお金に見立ててやりとりをすることにしていた為、お金をなくさないようにお財布を作ってみてはどうかと保育士が提案した。張り切って作る児もいれば、製作に苦手意識のある児は作らなかった。お財布を作らなかった児はチップを手にとってお買い物ごっこを楽しんだ。レベッカ先生との『お店屋さんごっこ』の際、意図的にお金やお財布を取り入れたことで『お店屋さんごっこ』にリアリティが少し出た。

③子どもたちだけの『お店屋さんごっこ』にもお金が取り入れられるようになった。「ください」「どうぞ」のやりとりから「これいくらですか？」や「おつりです」等のやりとりが増えた。

振り返り

4歳児クラス



テーマへの振り返り

これまで説明してきた「バーベキュー」や「お店屋さん」の他にも、特に女兒を中心にイメージの世界で遊んでおり、それにつられ男児数名が加わり、一緒に遊んでいた。秋になると男児だけでも『恐竜ごっこ』や『海賊ごっこ』などイメージを共有して楽しむ姿があった。

育てたい子どもの姿（年齢別保育目標に基づいたねらい）の振り返り

- ・4歳児クラスは、それぞれの遊びやその遊びのイメージの世界を伝え合うものの、それを互いに受け入れることなく楽しんでいた。
- ・イメージの世界をテーマにし、担任が場合によっては仲介したことで互いにイメージを伝え合い、楽しめるようになった。
- ・お互いのイメージを上げられるモノ（枝、お金など）があることで、イメージを共有する経験が出来、遊びを上げる事が出来た。その経験から共有できるモノがなくてもそれぞれのイメージを基にして遊ぶことができるようになった。

保育士がすべきこと（ねらいを叶えるための環境・配慮点）の振り返り

子どもが始めた遊びを見て興味がありそうだと判断し、より遊びが広がるよう玩具の設定や戸外活動の設定をしても興味を示さないことが多かった。また、こちらが遊びの中に入るよりも、介入せずに見守り、子どもから声を掛けられた時に遊びに入るような関わりが良かった。（イメージを言語化して何をしているのか説明することは、遊びを中断することになるのでこのクラスの子どもたちは、面白くなかったのだと思う。）